

# 「愛には偽りがあってはならない」

～偽善に注意～

ローマ12:9～13

## ■ 愛に偽りがあってはなりません。

愛の偽りとはどういうことでしょうか。愛の偽りとは「愛のようなもの」をいっています。夫婦関係、友達関係も偽りの関係が中心です。聖書の中には7通りの愛の表現があり、その中心はアガペー、フィレオ、エロスといわれています。この中のフィレオの愛を行使しようとするを偽りの愛といえます。条件付きの愛です。相手が自らに何かを供給してくれるためにその人を受容する行為です。自分が求めたものが返ってこなかったら終わりです。人間の心の中心は自分なのです。それは、多くの人間関係において、また、国家間においてもそうなのです。これがフィレオの関係です。この関係を聖書は偽りといっています。

文語聖書をみてみましょう。

『9 愛には虚偽(いつわり)あらず、悪はにくみ、善はしたしみ、

10 兄弟の愛をもて互(たがい)に愛(いつく)しみ、礼儀をもて相譲り、

11 勤めて怠らず、心を熱くし、主につかへ、

12 望みて喜び、患難(なやみ)にたへ、祈りを恒(つね)にし、  
13 聖徒の欠乏(とぼしき)を賑(にぎわ)し、旅人を懇(ねんご)ろに待(もて)なせ。』

この文語訳の聖書は原語訳に近い表現でまとめられています。愛とは何か、それが明確にまとめられています。ここに13のテーマをみることができます。

私たちは物事を正義で裁きます。それは偽善です。100%相手に真剣に向き合う行動でなければならないのです。与えるだけの愛。これは相手に与えることが喜びになる愛です。これは依存につながります。本来与えるだけで喜びなのですが、与えるだけで満ち足りなくなり、返ってくることを求めるようになります。これが偽善です。私たちはお返しを求めた問題をもってこれに気付いてほしいのです。聖書は裁きたくて言っているのではなく、きづいてほしいのです。私たちはしたいことはできず、ことさらにしたくないことをしてしまうのです。今はそんな存在になっていることを知ってほしいのです。

## ■ ◎悪を憎む

聖書はあなたを罪人だといっています。それはあなたを裁きたくていっているのではなく、罪がある存在であることに気づけといっているのです。だから戻れといっているのです。その戻る行為がこの13のテーマなのです。私たちもそれに倣います。愛するからその人を憎むのではなく本来の姿でいられなくする「悪」を憎むのです。愛は優しいだけではありません。アダムとイブが造られた時、アダムのあばら骨から一人の人を作ってこれをあなたの支え手にしようといのです。神様は人間にとって一番大切だと思える夫婦の関係を使って人間がどうあるべきかを教えるために夫婦という制度を与えられたのです。夫婦関係を通して人間関係を知るのです。生涯離れることがない夫婦関係を通して排除しないことを学びます。イエス・キリストがペテロに「下がれサタン」と言ったのは彼を本当に愛して怒ったのです。だから、排除はしませんでした。悪を憎むのです。

## ■ ◎善に親しみなさい

善との関係をギリシャ語の”コラオウ”という言葉が使われています。私たちにとって善は男性が自分の愛しい人を、抱くような存在なのです。人間は善を強いられて行うのではなく、愛する人を欲するくらい求めないとできない事を意味しています。そうでないと偽善になるのです。この偽善はサタンがおこします。サタンが光のみ使いのようにして化けてきて友達のような顔をして、あなたにささやきかけます。”俺はお前の友達だ。俺はお前と一緒にいる。俺を信じろ。”といってきます。周りにいる人たちの悪いところを示し、でも、俺に従ってくればお前は大丈夫っていいいます。でも、あとで、匙を投げて言います。”全部お前が決めてきただろう”と。だから私たちは自分を守らなければならなくなりました。アダムとエバを誘惑したときこの蛇は突然いなくなりました。神様がなぜこんなことをしたのかと聞いたなら、”あの蛇が～”といっても、俺は食べようなんて言っていないと偽ったので

す。そして人間も同じことをしました。この女が食べようって言ったから食べたんだ。と言ったのです。私たちは行いの中心が偽善者になったのです。ローマ人への手紙は私たちが偽善者であることを認めない限り変わらないと言っています。私たちはそれが認められないと何かに心を向けていこうとします。自分が偽善者であることに気づかないということは自分の心にガン細胞を増殖させているようなものです。だから、聖書は最初から最後まであなたの心にガン細胞があるから早く病院に行きなさい。一週間に一度病院にいったらガン細胞を壊してきなさいといわれています。だから十戒の最初に”私のほかに神があつてはならない。この安息日を聖とし、それを大切に守りなさい。”とされているのです。

## ■ ◎勤勉で怠らず

なぜ、勤勉さは愛なのでしょう。今日本は週休3～4日になろうとしています。休みを多くとる方向に変わろうとしています。しかし、聖書には、人は1日目から6日目まで苦しんで糧を得なければならない。なぜなら、この地があなたのした罪のゆえに呪われたからだ。と書かれています。しかし労働はバツではありません。クリスチャンは与えられた労苦の中で神様からの役割を知り、壊れた社会を建て直すために6日間霊に燃えて働くのです。そうして、休むのであれば明日のために喜んで休むのです。もし怠惰、疲れに陥っているのなら神様との関係が希薄になっているかもしれません。忙しいは心を減ぼす言葉です。

## ■ ◎兄弟愛をもって心から互いに愛し合い

兄弟愛は近い人のことではありません。対象は世の中の人です。排他的ではいけません。しかし、尊敬することが難しいのです。尊敬はその人の行為からほうまれません。尊敬は神様が造ったその人の役割を知るからできるのです。ですから自分の長所がわからないなら人の長所もわからず、あら捜しをするようになります。教会はその人の役割を見出すところです。教会は体で、それぞれの役割があつてそれぞれの働きを認め合い、相手がいってくれることを尊ぶなければ私たちは保つことができません。

## ■ ◎望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈る

望みを抱くというのは必ずこうなるという確信に元づく望みです。(ヘブル11:1) 患難に耐えられる理由は我慢ではありません。我慢は望みがない状態で食いしばっているのです。忍耐は待っている状態です。何かがあるから待つのです。聖書は動機が大切です。

## まとめ

自分の中にある偽りを知る

愛によって!!生きる

悪を憎む

善に親しみなさい

元の姿へ

水という存在は本来たまって液体です。ところが、いつの間にか蒸発して塵にくっつきふわふわ雲になっています。本来の自分を見失っている状態です。そこでもう一度いろいろなものが合わさったならば水になって降りてきます。ローマ13章に書かれていることは、私たちはこの水のようなもので、今あげられた13の要素が合わさらないと浮いてふわふわしている状態で、いつまでたっても役割を果たすことができなと伝えてあります。自分が13の要素の中で本当に自らの役割を果たすべく愛に結ばれる行為ができているかを考えてみたいのです。一粒の粒子では役割を果たすことができません。本来の自分の姿で本当のコミュニティを築くこと…。自らの性質を失わない為にこの13のテーマは必要です。これを私たちの生きる土台として行きましょう!

(要約者:澤口 明子)

(2019年11月10日)